銭形平次捕物控

火遁の術

野村胡堂

青空文庫

一

「親分、良い陽氣ぢやありませんか。植木の世話も結構だが、たまには出かけて見ちやどうです」

ガラツ八の八五郎は、懷ろ手を襟から拔いて、蟲齒が痛い——て恰好に頬を押へ乍ら、裏木戸を膝で開けてノツソリと入つて來ました。

「朝湯の歸りかえ、八」

平次は盆栽の世話を燒き乍ら、氣のない顏を擧げます。

「ヘツ、御鑑定通り。手拭が濡れてゐるんだから、こいつは錢形の親分でなくたつて、朝湯と判りますよ」

「馬鹿だなア、手拭は俺から見えないよ、腰へブラ下げてゐるんだらう、——番太や權助ぢやあるめえし、良い若けえ者が、手拭を腰へブラ下げて歩くのだけは止しなよ。見つともねえ」

「こいつは濡れてゐるから肩に掛けられませんよ、——いつか手に持つて歩くと、不動樣の繩ぢやあるめえ、そんな不粹な恰好は止すが宜い——つて、親分に小言を言はれたでせう」

「よく覺えてゐやがる」

「躾の良い兒は違つたもので——」

「手拭をよく絞らないからだよ、海鼠のやうにして歩くから扱ひにくいんだ。第一その鬢がグショ濡れぢやないか、水入りの助六が迷子になつたやうで、意氣過ぎて付合ひきれないぜ」

「あ、これですかえ。成程朝湯の證據が揃つてやがる」

ガラツ八は腰から海鼠のやうな手拭を拔いて、鬢のあたりをゴシゴシとやりました。

「自棄に擦ると、小鬢が禿げ上がつて、劍術使ひのやうになるぜ」

「鬢のほつれは、枕のとがよ——と來た」

「馬鹿だなア」

平次は腰を伸ばして、暫くはこの樂天的な子分の顏を享樂して居りました。

「ところで親分」

「何んだい」

「不動樣で思ひ出したが、今日は道灌山に東海坊が火伏せの行をする日ですよ。大變な評判だ、行つて見ませんか」

「御免蒙らうよ。どうせ山師坊主の興行に極つてゐるやうなものだ。行つて見るとまた飛んだ殺生をすることになるかも知れねエ」

平次は御用聞のくせに、引込み思案で、弱氣で、十手捕繩にモノを言はせることが嫌ひならなかつたのです。

「火伏せの行だから、火難除けになりますよ」

「家は借家だよ。焼けたつて驚くほどの身上ぢやねえ」
「呆れたもんだ――家は借家でも、火の車には悩まされ續けでせう。こいつも火伏せの禁呪でどうかなりやしませんか」
ガラツ八は自分の洒落に堪能して頤の下から出した手で、しきりに顔中を撫で廻して居ります。
「成程、そいつは耳寄りだ。火の車除けの有難いお護符が出るとは知らなかつたよ。ブラリブラリと行つて見ようか、八」
「有難てえ。今日の道灌山はうんと人出があるから、何んか面白いことがあるやうな氣がしてならねえ」
「火除けの行だから、キナ臭かつたんだらう」
「違げえねえ」
道灌山へ平次と八五郎が向つたのは、悠々と晝飯を濟ましてから、火伏せの行が始まるといふ申刻時分には、二人は無駄を言ひ乍ら若葉の下の谷中道を歩いて居りました。

二

東海坊といふのは、その頃何處からともなく江戸に現はれた修驗者で、四十五六の魁偉な男

でしたが、不思議な法力を持つと噂されて、僅かの間に江戸中の人氣を攫ひ、谷中に建てた堂宇は、小さい乍ら豪勢を極め、信者十萬、日々の賽錢祈祷料、淺草の觀音様をさへ凌ぐと言はれました。

東海坊の法力で、一番江戸の町人を驚かしたのは、如何なる難病も癒らぬことはないと言はれた祈祷でした。越後屋の隱居は三年越立たぬ腰が立ち、伊勢屋の息子は五年がかりの勞症がケロリと治つて嫁を貰ひ、旗本三右衞門の奥方は、江戸中の醫者に見放された眼病が平癒し、小梅の豪農小兵衞は、氣が觸れてあらぬ事を口走つたのが、拭ふが如く正氣に返つて、谷中の堂に銅の大手洗鉢を寄進したと言つた比ひの噂が、風に乘つて撒布されるやうに、江戸中へ廣がつて行つたのです。

その日東海坊は火伏せの行を修して、火事早い江戸の町人を救ふと觸れさせ、人家に遠い道灌山を選んで、火行の壇を築かせました。九尺四方白木の道場の正面には、不動明王の御像を掛けさせ護摩壇を据ゑ、燈明供物を並べ、中程のところに東海坊、白衣に袈裟を掛け、散らし髪に兜巾を戴き、揉みに揉んで祈るのです。壇の四方を取卷く群衆信徒は、その數何千とも知れません。賽錢の雨を降らせ乍らドツと聲を併せて東海坊の修法を讃仰するのでした。

町方から取締りの役人は出て居りますが、外の事と違つて、信心に關する限り、幕府は放任政策に徹して、大抵のことは見て見ぬ振り。東海坊の軍師格で、その信者の一人なる浪人者御厩左門次が同じく東海坊の門弟で、用人を兼ねてゐる定吉といふ白い道服の中年男と共に、群

衆の整理、修法の進行等、一瞬の隙もなく眼を配つて居ります。

時刻が移るにつれて、群衆の心理は夢幻の境に引入れられる様子でした。護摩の烟は濛々と壇をこめて、東海坊の素晴らしい次低音だけが、凛々と響き渡るのです。やがて、

「それ――ツ」

壇上の東海坊が聲を掛けると、壇の四方を埋めて人間の脊丈けほどに積み上げた夥しい枯柴に油を注ぎかけて、護摩壇の火を取つて移しました。

「ワ――ツ」

と唸りを生じた群衆の聲と共に、壇をめぐる枯柴は燃え上がり、一擧に俄か造りの壇を舐めます。

「今こそ、我が法力を知つたか」

壇の中央、焔の眞ん中に立ち上がつた東海坊は、高々と數珠を打振り〳〵、虎髪をなびかせて叱※するのです。

「南――無」

群衆はこの奇蹟に直面して、唯感嘆の聲を併せるばかり、中には大地に土下座して、隨喜の涙を流す者さへあります。

枯柴は完全に燃えて、焔は壇を一杯に包むと、こゝにまた思ひも寄らぬことが起りました。今の今まで、高らかに呪文を稱へて、その法力を誇示してゐた壇上の東海坊は、何に驚いたか、

急に壇上を驅け廻り、床を叩き、壇を蹴飛ばし、淺ましくも怒號する態が、渦巻く焔の間から、チラリチラリと隱見するのです。

「た、助けてくれ――ツ」

壇上に狂態の限りを盡す東海坊の口から、到頭救ひを求むる聲が漏れました。焔は壇上に這ひ上がつて、修驗者の白衣に移り、メラメラと袈裟を嘗め上がる樣子が、折から暮れ行く道灌山の草原の上に灰色の空を背景にして、あまりにもまざ〳〵と見えるのです。

東海坊は焔に包まれて、犬の如く這ひ廻り、蟲のやうに飛びました。が、石を積んで樫の厚板を並べた床は、東海坊の十本の指が碧血に染れる努力も空しく、ビクともする樣子はなく、四方に積んだ枯柴は、丈餘の焔を擧げて、翅があつても飛び越せさうもありません。

山に溢るゝ善男善女は、唯もう『あれよ〳〵』と言ふばかり、今は尊い修驗者に對する讃仰の夢も醒めて、恰ら目のあたりに地獄變相圖を見るの心地。渦巻く焔と煙の中に、死の苦鬪を續くる東海坊の淺ましい姿を眺めて、動きもならず動搖み打つのです。

「親分」

「八」

錢形平次と八五郎は、たつたこれだけでお互の思惑を讀み合ひました。

「水だ、水だ」

「早く火を消せ」

ガラツ八は青松葉の枝を折つて、枯柴の火を叩くと、平次は壇の四方に用意した、幾十の手桶のうちの一つを取つてサツと猛火に水を注ぎかけました。

「それツ」

と群衆の中から加勢に飛出した若い者が、五人、八人、十人、その人數が次第に多くなると、自然命令者になつた平次の號令に從つて八方から猛火を消し始めたのです。

この仕事は相當以上に骨が折れました。山の上にあつたたつた一つの井戸は大した役には立たず大火を焚くために、役人の指圖で用意した手桶の水も、間もなく盡きてしまひましたが、多勢の熱心に助けられたのと、燃え草が枯柴で、他愛もなく燃えきつてしまつたので、四方が雀色になる頃までには、何うやら斯うやら火を消して了つて、平次と八五郎は、掛り同心永村長十郎、土地の御用聞三河島の淺吉等と一緒に、燒跡の護摩壇に檢視の足を踏込んだのです。

その時、群衆はもう大方散つて、殘るのは東海坊の弟子達と、世話人數名と、火を消すのに手傳つた、丈夫な男達が二三十人だけ。暮色は四方をこめて、燃え殘る薪があちこちに煙をあげて居ります。

三

「あツ、人が――」

眞先に壇の上に飛上がつた三河島の淺吉は立ち縮みました。
「東海坊ぢやないか」
永村長十郎が續きます。
「火伏せの修驗者が燒け死んだぜ、親分。こいつア――」
「馬鹿ツ」
平次に睨まれて、ガラツ八は危ふく口を緘しました。放つて置いたら――こいつア大笑ひだ――とでも言つたことでせう。
「法力が足りなかつたんだ、可哀想に」
年配者の淺吉は、東海坊に同情を持つて居る樣子です。
四方に暮色が迫つたので、提灯を呼びました。さうでもしなければ、半分燒けた壇は、足許が危なくて、うつかり歩けません。枯柴の火は大方消えて、壇を取卷く數十の好奇の眼は、なかなか立去りさうもなく、固唾を呑んでことの成行を見て居ります。
「法力なんてものは、最初からなかつたんだよ、兄哥」
平次は壇の上を一と廻りすると、靜かに顏を擧げました。
「そいつは錢形の――」
淺吉は講中の一人であつたらしく、平次の言葉に不平らしい樣子です。
「これを見るが宜い。床はガンドウ返しになつて、煙が一パイになつた時、東海坊はそつとス

ツポンへ抜ける仕掛けだつたのさ」

「えツ」

「そいつが、何んかの弾みで開かなかつたんだ。東海坊が火に追はれ乍ら、床板ばかり氣にすると思つたが、こいつだよ」

平次が指さした。

提灯を突き付けると、成程床板には二尺四方ほどの鋸が入つて、何にかの仕掛けで開くやうになつて居るのが、嚴重に締つてゐて、叩いても踏んでも開きさうになかつたのです。

「フーム、天罰だな」

永村長十郎は唸りました。長い間愚民を惑はしてゐた修驗者が、命がけの詭計に失策して、猛火の中に死んだのも、江戸御府内の靜謐を念としてゐる長十郎に取つては、全く天罰としか思はれなかつたのでせう。

「呆れた野郎だ」

淺吉はたつた一ぺんに愛想が盡きた樣子で、ペツ、ペツと唾を飛ばして居ります。

一刻の後には彌次馬もすつかり散り、永村長十郎も「東海坊の弟子共や世話人一統は追つての御沙汰を待つやうに」と不氣味な言葉を殘して引揚げました。

「親分、歸らうぢやありませんか。天罰なんか縛れやしませんよ」

ガラツ八は大きな欠伸をし乍ら云ひます。

「腹が減つたんだらう。——此處ぢやろくな水も呑めやしねエ。谷中へ行つて何にか詰めて來るが宜い」

平次は燒け殘る壇の上から動かうともしません。

「親分は？」

「腹なんか減らないよ、——俺はもう少し此處に頑張つて、その天罰野郎の面を見て行きてえ」

「それぢや、親分？」

「大きな聲を出すな、其邊にはまだ多勢居るんだ」

「あつしも手傳ひますよ、親分。さう聽くと、腹が一杯になるから不思議で——」

「さう言はず行つて來るが宜い。歸りには鳶頭の家へ寄つて、道具を借りて來るんだ。梃と槌と鋤だ」

「何をやらかすんで、親分？」

「この下に天罰が居さうなんだよ」

平次は暗がりの中で床板を指し乍ら、ガラツ八に囁くのでした。

八五郎はいろ〳〵の道具を借りて、すぐ引返して來ました。斯うなるともう、腹の減つた事などを考へては居られなかつたのです。

「親分、何をやらかしや宜いんで？」

ガラツ八は七つ道具をドタリとおろしました。

「床板を剥ぐんだ。樫の木で、やけに丈夫だから、道具がなくちやどうにもならない」
「三河島の親分は？」
八五郎は板の隙間に梃を打ち込み乍ら、この容易ならぬ勞作を手傳はせる相手を物色します。
「弟子と世話人を見張つてゐるよ。あの中に天罰野郎が居るかも知れない」
平次は獨り言のやうに言ひ乍ら、梃の先をグイと押しました。
「あつしがやりますよ、親分。提灯を持つて居て下さい」
「頼むとしようか。何にか飛出したら、構ふことはねエ、存分に縛り上げてくれ。お前の手柄にしてやるから」
「ヘツ、脅かしちやいけません」
「大丈夫だよ、其處から何んにも飛出しやしない」
「自棄に頑丈ですぜ、親分」
そんな事を言ひ乍らも金梃のお蔭、二枚の板はすぐ剥げました。
「成程、龕燈返しの仕掛けを、下から石と材木で塞いだんだ——思つた通りだよ、八」
平次は提灯を突きつけます。
「入つて見ませうか」
「さうしてくれ、その材木を取拂つたら身體くらゐはもぐるだらう」
「提灯を貸して下さい」

「そら」

八五郎は提灯を片手に、床下の穴の中へ潜り込みました。横穴は思つたより深いらしく、暫くすると灯が見えなくなつて、それつきり八五郎は歸つて來ません。

四

「親分」

遠くの方から八五郎の聲が筒抜けます。

「何んだ、八」

「穴の中で提灯が消えたから、引返さうかと思つたが、忌々しいから手探りで眞つ直ぐに行くと、變なところへ出ましたぜ」

「茶店の床下だらう」

平次は何んの氣取もなく、こんな事を言ふのです。

「ヘツ、どうしてそんな事が？」

「近くて、人目に隱れて、穴の中へもぐり込めるといふ場所は外にないよ」

「さすがは親分だ。あつしは地獄の三丁目かと思ひましたよ。どうかしたら、閻魔の屋敷の雪隱の床下かも知れないと思つて這ひ出すと、眼の前に燃え殘りの護摩壇が見えるぢやありませ

んか」

ガラツ八の話は手振りが交りました。

「怪談噺は後で聽くとして、それで、大方解つたよ。修驗者東海坊は、矢張り人に殺されたんだ」

「ヘエ？――」

「火伏の行とか何んとか言つて、散々賽錢と祈祷料をせしめた上、四方から火を掛けさせ、煙が一パイになつた時を見測らつて護摩壇の抜け穴から、茶店の床下へ抜ける筈だつたんだ。そいつを仕掛を知つてゐる者に狙はれて、床下から龍燈返しを塞がれ、多勢の見る前で燒け死んで了つたのさ。天罰と言へば天罰だが、この天罰は少しタチが惡い」

平次の説明して行くのを聽くと、東海坊が詭計の裏を掻かれて、猛火の中に死んだ經緯、一點の疑ひもありません。

「その天罰野郎は何奴でせう、親分」

「あの中に居るよ。――行つて見ようか、八」

平次とガラツ八は、其處から少し離れて、蟲聽き臺の捨石や床几に思ひ〳〵に腰を掛けて、三河島の淺吉の監視の下に居る十五六人の人數に近づきました。

「どうだい、錢形の」

淺吉の口吻には、少しばかり挑戰的なものがありました。

「東海坊は矢張り殺されたに違げえねえ。拔け穴を下から塞いだ奴がゐるんだ」
「ヘエ、そいつは本當かい」
淺吉は改めて提灯をかゝげて、世話人や弟子達の顏を見廻しました。夜風のせゐか、男女取交ぜ十幾人の顏は、心持緊張して、搜るやうな瞳が、お互の間をせはしく往復します。
「谷中の堂へ引揚げようか、此處ぢや調べもなるめえ」
「よからう」
平次と淺吉は、土地の下つ引に死骸と燒跡の監視を賴み、掛り合ひの十幾人には因果を含めて、其處からあまり遠くない東海坊の堂まで引揚げさせました。
如何にも急造らしい小さな堂ですが、豪勢な調度や、金色燦然たる護摩壇は、如何にも流行の神らしく、白痴脅かしのうちにも、人を壓する物々しさがあります。
「兄哥は暫く見て居てくれ。俺が一寸小手調べをして見るから」
「宜いとも」
平次の謙遜な調子に氣をよくして、淺吉は先輩らしく本堂の奥に頑張りました。其處から居流れて、弟子世話人達十五六人、平次と八五郎はそれを挾んで左右に控へます。
「一番弟子とか何んとか言ふのは誰だい」
平次は一座を眺め渡しましたが
「私でございます。東山坊と申します」

白い物を着て居りますが、髪形ちも俗體の四十男が膝を直します。少し狡るさうな、シヨボシヨボ眼と、大きな鼻を持つた男です。

「親の附けた名があるだらう」

「定吉と申します。ヘエ、生れは行徳で、親は網元でございました」

「道樂に身を持崩して、東海坊の弟子になり、大法螺の相槌を打つてトウセンボウとか名乘つたんだろう」

「ヘエ――」

日頃にもない平次の舌の辛辣さ、定吉の東山坊は面目次第もなく頭を下げました。

「その次は？」

「拙者だ」

昂然として顔をあげたのは、一寸良い男の浪人者御厩左門次でした。二十七八、身扮もそんなに惡くはなく、腕つ節も相應にありさうです。

「お名前は？」

「御厩左門次、俗名だけしかない。俺は用人棒で修驗者ではないからだ。主人のお名前は勘辨してくれ、――身を持崩して東海坊のところに轉げ込んだが、東海坊の出鱈目な大法螺に愛想を盡かして近いうちに飛出すつもりだつたよ」

御厩左門次自棄な苦笑ひをして居ります。

「どんな法螺で？」

「火伏せの行だつて、本人は火遁の術のつもりさ。する事も言ふことも皆んな法螺だ。――尤も病氣だけは不思議によく癒したが、癒つても後で金を絞られたから、丈夫になつても樂ぢやあるまい」

「ところで、外に弟子はないのか」

平次は鉾を轉じて、不安にをのゝく十數人を見やりました。

「あとは子供と女ばかりですよ」

定吉の東山坊は、さう言ひ乍ら、二人の子供と二人の女を指さしました。二人の小僧はどつちも十二三で、物の數でもなく、二人の女はこんな邪惡な修驗者にあり勝の妾で、一人はお雪と言つて二十七八、一人はお鳥と言つて二十三四、二人とも恐ろしく派手な風をして居りますが、病身らしく蒼ざめて、相當の力を要する、護摩壇の下の細工などは出來さうもありません。

信徒の總代――世話人と呼ばれて居るのは二人、一人は下谷一番と言はれた油屋で、大德屋德兵衞。もう一人はこの堂を建てた大工の竹次、二人とも五十前後、町人と棟梁で肌合は違ひますが、物に間違ひのありさうもない人間です。

「どうして東海坊の世話方になつたんだ」

平次の問ひに對して、大德屋は口を開きました。

「娘が長年の病氣を治して貰ひました。嫁入前の十九でございます。その御恩報じに、番頭と

一緒に先達様の御世話を引受けて居ります」

「娘は？」

「これに参つて居ります。菊と申します」

徳兵衛の後ろに小さくなつて居る娘――八方から射す燈明の中に浮いて、それは本當に觀音様の化身ではないかと思ひました。少し華奢で弱々しく見えますが、多い毛の緑も、細面の眞珠色も、此世のものとも思へぬ氣高さ――『よくもこんな美しいものを生んだことかな』と、もう一度父親の顔を振り返つて見るほどの美しさです。その後ろに小さく控へたのは番頭の宇太松、これは二十七八の至つて平凡な正直さうな男でした。

續いて棟梁の竹次は何んの巧みもなく、

「あつしの疝痛と、女房の腹痛を直して貰ひましたよ。それからは御恩返しにいろ〳〵働いて居るだけの事で、へエー」

至つて無技巧にそんな事を言ふのです。續いて父親を癒して貰つたと言ふ、越後屋の伜、女房の氣鬱が治つた小梅の百姓小兵衛、等々、何んの不思議もありません。

「東海坊の祈祷で治らない者もあつたらう」

平次は妙なことを訊きました。

「業の深いのは癒らないとされて居ります。例へば御徒町の伊勢屋の利八さん、これは喘息がどうしても治らず、先達様を怨んで居りました」

一番弟子の定吉は應へました。

「その利八は今日來て居たのかな」

「顏が見えました。それから門前町の文七、伜の文太郎は七日七夜の祈祷(きたう)で百兩もかけたのに助からなかつたと、先達樣の惡口を言ひ觸らして居ります。今日も來て居たやうですが、先達樣が火の中で死んだと解ると、底の拔けるやうな大笑ひをして歸りました」

定吉の話で、東海坊の法力なるものの正體と、それを圍(めぐ)る恩怨の渦が次第に判るやうな氣がします。

「とこをで護摩壇の下の拔(ぬ)け穴だ。あれを知らなかつたとは言はさない。誰と誰が知つてゐた」

「――」

定吉と左門次は顏を見合せて默り込んでしまひました。

「それくらゐの事は言へるだらう。誰と誰が拔け穴のあることを知つて居たんだ」

「――」

頑固(ぐわんこ)な沈默が續きます。

「親分さん」

「あ、大德屋さんか」

「私から申しませう」

大德屋は靜かに膝を進めます。

五

「え？　お前さんが知つてゐるのかい」

平次も少し豫想外でした。世間の噂では、娘の病氣は治つたが、それから東海坊にだまされて、下谷一番といふ身上の半分は痛めたらうと言はれる大徳屋徳兵衛は、言はゞ東海坊に取つては、大事なだまし相手で、このお客様に抜け穴の祕密を知らせる筈はないやうに思つたのです。

「御不審は御尤もですが、先達様――東海坊様は、そんな氣の小さい方ぢや御座いませんでした。――俺は知つての通りどんな病氣でも直す力があるんだから、諸人助けのために、少しは細工もする、皆んな手傳つてくれ、――と斯う仰しやつて、此處に居るほどの人數は、大抵抜け穴のことを聽かされて居ります。定吉さん、御厩様、それに棟梁も、越後屋さんも――」

徳兵衛は一座を見渡し乍ら指を折るのです。誰も抗辯するものはなく、合槌を打つものもありません。

「さう打ち開けてくれると大變有難い。――ところで、あの騒ぎの眞つ最中――といふよりは、壇の四方に火を掛ける頃、これだけの人數は大抵顔を揃へて居たことだらうな」

「――」

十幾人顔を見合せて、お互に探り合ひました。

「騒ぎの眞つ最中といつても、東海坊が壇に登つてから、枯柴に火を掛ける迄だ」

平次は註を入れます。

「親分、その前に龕燈返しの仕掛けを塞ぎやしませんか」

ガラツ八はそつと袖を引きました。

「いや、仕掛けに變りのないことを見窮めずに、東海坊は火を付けさせるものか。曲者が穴にもぐり込んだのは東海坊が壇に上つてから枯柴に火をかける迄の間だ」

平次の言ふことは自信に滿ちて居ります。

「確としたことは判りませんが油を掛けたり、火を付けたり銘々受持があつて、ちぐはぐにならないやうにしますから、私共二人づつ四方に分れて居りました。私と御厩様、越後屋さんと大徳屋さん、棟梁と小兵衛さん宇太松さんと五郎次さん――」

定吉は指を折り乍ら説明するのです。

「祈祷がきかなくて、東海坊の惡口ばかり言つて歩いたといふ門前町の文七と伊勢屋の利八は、抜け穴の事を知らないだらうな」

「さア、其處までは解りません。何分そんな事は一向氣にかけない東海坊様でしたから、火伏の行などと言つて諸人を騙すのは、言はゞ火遁の術で、衆生濟度の方便だと思ひ込んでいらつしやいました」

定吉の説明する、東海坊の人柄は益々怪奇です。狂信者型の人間には、そんなのもあるのか知らと錢形平次も首を傾けました。

「ところで、皆んなの手を見せてくれ」

吶嗟に平次が合圖をすると、八五郎と淺吉が手を貸して、十數人の掌を三方から調べ始めました。

「あわてて拭いたつて、追つ付くかい、馬鹿野郎ツ」

越後屋の番頭の五郎次は、したゝか淺吉に頬桁を殴られて、キヨトンとして兩掌を擧げました。

一人々々調べて行くと、嘗めたやうに綺麗なのは、一番弟子の東山坊こと定吉と、御厩左門次と女達。泥と炭でひどく汚れてゐるのは、大徳屋の主人徳兵衛と、棟梁の竹次。あとの五六人は薄汚い程度で、格別、炭も泥も附いては居ず、洗つた様子もありません。

「洗つたのか」

平次は定吉の顔を見詰めました。

「ヘエ、ひどく汚れましたので」

「俺も洗つたが、悪いか」

御厩左門次は、何にか突つかゝりさうな物言ひです。平次はそれに取合はず、

「八、今度は着物だ、手傳つてくれ」

「さア、一人づつ立つて見ろ」

夥しい燈明の前に、一人づつ立たせました。

定吉も左門次も、徳兵衛も竹次も、火を消すのに手傳つて、少しづつは着物が汚れて居りますが、狭い抜け穴を潜つたと思はれる程のはありません。わけても汚れてゐるのは定吉で、一番綺麗なのは身だしなみの良い徳兵衛です。

六

それから五六日、錢形平次は八五郎以下の子分や下つ引を動員して、定吉、左門次、徳兵衛、竹次、文七、利八、その他關係者を洗ひざらひ調べ抜きました。

日頃の行状、金廻り、東海坊との關係、一つも漏らしません。抜け穴の仕掛けの下に石と材木を積んだのは、咄嗟の間の細工で、女や子供には出來ない藝と睨み、調べは專ら男に集中しましたが、それでも、東海坊をめぐる女の一群に關心を持たない平次ではありません。

東海坊といふ修驗者は、經文一つ讀めないやうな、無學鈍根の男ですが、生得不思議な精神力の持主で、——今日の言葉で言へば、自己催眠といふ類のものでせう。憑依状態になつて熱祷をこめると、氣の弱い信者達の病氣は、不思議にケロリと癒るのでした。

この種の邪教的な氣根の持主らしく、東海坊も女犯にかけては、大概の醜臭坊主に引けを取

らず、妾二人を蓄へてる外、講中の誰彼に手を出して、絶えず問題を作りますが、そんな不始末は不思議なことに狂信者達を驚かさなかつたのです。

「親分、三河島の親分は、到頭擧げて行きましたよ」

ガラツ八の八五郎は、息を切つて飛込みました。事件があつてから七日目の朝です。

「誰だ、文七か、利八か」

平次も少し氣色ばみます。

「一番弟子の定吉ですよ。——近頃あの野郎にも人氣が出たから、師匠の東海坊が死ねば、そつくり跡を繼いでうまい汁が吸へると思つたんでせう」

「そいつは三河島の兄哥の見當違ひだ。平吉は東海坊の介添へで、壇の正面を一寸も離れなかつた」

「でも、枯柴へ油をかけて火をつけた時は、皆んなそれに氣を取られて、定吉が居なくなつても、ほんの暫くなら氣はつきませんよ」

「八、お前にしちやうまい事を言つたぜ。火をつけた時は皆んなそつちへ氣が外れるから、定吉なんかに目もくれる者はない——とね、成程それに違ひない」

平次は妙なところへ感心しました。

「——お前にしちや——は氣に入らないね、親分」

「贅澤を言ふな、それで澤山だ。——定吉に氣がつかないくらゐだから左門次にも、徳兵衛に

も、竹次にも氣がつかなかつたわけだ。待てよ、東海坊が壇に登つて、薪に火をかける前に、曲者が穴へ潜り込んだと思つたのは俺の間違ひかな」

「親分、感心して居ちやいけません。それぢや、定吉が下手人ですかい」

「いや違ふ。定吉は變てこな白い着物を着て居た。あの扮ぢや穴へ潜れない、手を洗つたのは一應臭いやうだが、本當に穴に潜つた奴なら、手を洗ふと却つて疑はれるくらゐのことに氣が付くだらう。曲者は手を洗はない奴だ」

平次の推理は微に入り細を穿ちます。

「それぢや、あの浪人者も？」

「あれは怪しい。が、腕が出來さうだ。東海坊が氣に入らなきや、細工をせずに斬つて捨てるだらう」

「成程ね」

「東海坊の祈祷がきかなくて、一人ツ子に死なれたといふ、門前町の文七が一番怪しい。あの日何處に何をしてゐたか、——近頃東海坊の惡口を言はなくなつたか。そんなことをよく聽き込んで來てくれ」

「そんな事ならわけはねエ」

「あ、一寸待つた八。それからもう一つ、あの日道灌山へ、大徳屋徳兵衛は夏羽織を着て來なかつたか、それを訊いて來てくれ」

「ヘエ――」

ガラツ八の八五郎は何が何やらわけも解らず、闇雲に飛出してしまひました。

「お靜、羽織を出してくれ。一寸下谷まで行つて來る」

何時にもなく羽織を引つかけた平次、それから下谷一圓を廻つて髪結床、湯屋、町醫者と、根氣よく訪ねました。

日が暮れて歸つて來ると、八五郎は一と足先に戻つて、――待人來たらず――を繪で描いたやうに、入口の格子に凭れて頤を長くして居ります。

「あ、親分。待つてましたぜ」

飛付くやうな調子。

「嘘を突きやがれ。一と足先に歸つたばかりぢやないか」

「どうして、それを」

「路地の口へ干したカキ餅を引つくり返されて、煎餅屋のお神さんブウブウ言ひ乍ら、半分くらゐ拾ひ込んだところへ俺が歸つたんだ。あんな粗相をするのは、この路地の中に一人も住んぢや居ないよ」

「ヘツ」

八五郎まさに一言もありません。

「ところで、何を拾つて來た」

「下手人は門前町の文七に違ひありませんよ、親分。あの日道灌山へ行つてゐたことは皆んな知つてゐるし、護摩壇の下に抜け穴のあつたことも、前から知つて居たつて本人が言ふさうですよ」

「それから」

「今でも滅茶々々に東海坊の悪口を言つて歩きますよ。あの野郎が焼け死んだのは天罰だ。もう三月も生きて居たら、この文七が殺す筈だつた――つて」

「三月は妙に刻んだね」

「無盡の金が取れるから、東海坊を叩き斬つた上、伜の骨を持つて高野山へ行く氣だつたさうですよ。自分が下手人だと白状してゐるやうなものぢやありませんか」

ガラツ八は勢ひ込んで説明を續けます。

「それつきりか」

「これつきりでも縛れるでせう、親分」

「よし、よし、文七は無盡の金が取れるまで逃げるやうな心配はあるまい。先づそれは安心として置いて、――ところで、大徳屋はあの日夏羽織を着て居たのか」

平次は夏羽織の方に氣を取られて居る様子です。

「着て居たさうですよ。多勢の人が見て居まさア。小紋の結構な羽織で」

「谷中へ引揚げた時はそれを着て居なかつたね」

「ヘエ――」
「それで解つた。八、一緒に來ないか、面白いものを見せてやる」
「何處へ行くんで、親分」
「何處でも宜い」
平次は疲れた樣子もなく、ガラツ八を伴れてまた下谷へ取つて返したのです。

七

平次が訪ねて行つたのは、下谷一番と言はれた、油屋の大徳屋でした。
「誰も聽いちや居ないでせうな」
平次は煙管を出して一服つけると、靜かに斯う切り出しました。
「此處は離屋で、誰も聽く筈はありません。娘も奉公人も母屋で、廊下を人が來ると直ぐ知れますよ。――一體どんな御用で、親分？」
物々しい空氣に壓倒されて、徳兵衛の唇の色は少し變りました。が、大店の主人らしい鷹揚さは失はず、どんな事を言ひ出されても驚くまいとするやうに、膝に置いた手は、犇と單衣を掴んで居ります。
「外ではない。――東海坊を自滅させたいきさつ、あつしは皆んな知つてゐるつもりだ。が、

ならう事なら本人の口から言つて貰ひ度い」

　平次の言葉は此上もなく靜かですが、釘を打ち込むやうに相手の肺腑に響く樣子です。

「それは？」

「いや、辯解は無用だ。――言ひにくければ、あつしが代つて言はう。いきなり縛つて突き出すのはわけもないが、聽けば娘のお菊さんの婚禮が、明日に迫つて居るといふ話。その前の晩に繩付を出しちや氣の毒だと思ふから、わざ〳〵やつて來たやうなわけさ」

「親分さん」

「大德屋さん。――あつしは下谷中を驅け廻つて、七日の間にこれだけの事を搜り出した。違つてゐるなら違つてゐると言つて貰ひ度い。――大德屋の一人娘下谷小町と言はれたお菊さんは、父親の手一つで育つたが、何んの因果か二つの疾ひがあつた。一つは癲癇で、一つは――これは言はない方が宜い。若い女には此上もない恥かしい病氣だ」

「――」

「あらゆる醫者にも診せ、加治祈祷の限りを盡したが、十九の春までどうしても癒らなかつた。嫁入りも婿取りも諦らめて居ると、江戸で五番とは下らぬ大町人室町の清水屋總兵衞の伜總太郎が見染めて、人橋架けて嫁にくれるか、それがいやなら、持參金一萬兩で聟に來ても宜いといふ話だ。當人のお菊も親のお前さんも乘氣になつた。この緣を逃してなるものかと思つたが、悲しいことにお菊には人に明かされない病氣がある」

「――」

徳兵衛は深々と首を垂れて、平次の論告を聽き入るばかりです。

「フト人の噂で聽いた東海坊の祈祷、これを頼むと不思議に驗があつて三月經たないうちに二つの惡病がケロリと癒つた。お前さんも、お菊も、天にも登る喜びで、早速婚禮の話を進めたが、――どつこい、東海坊は自分の法力を諸人に知らせるために、癒した病人のことを、皆んな言ひ觸らす癖がある――」

「――」

「これにはさすがに驚いた。危ふく言ひ觸らされさうになつて、幾度止めたかわからない。しまひには、百兩、三百兩、五百兩と、鰻上りに口止め料を取られ、下谷一番の油屋と言はれた大徳屋の身上も、この儘で行つては年一杯も保ちさうもない」

「――」

「もう一つ惡いことに、娘の病氣のことを言はれ度くなかつたら、當人を谷中の堂へ奉公に出せ、――と東海坊が言ひ出した。それに相違あるまい」

「――」

平次の論告は此處まで來ると一段落で、暫く口を縅んで、徳兵衛の出やうを見ました。行燈の燈心はジ、ジと油を吸つて、夏の蟲はもう、庭で鳴いて居る樣子。勢ひ込む八五郎の息づかひだけが異常に荒々しく聽えます。

「その通りでございます、親分さん。祕し隱したことをよくそれまでお判りになりました。全く恐れ入りました」

徳兵衛は疊の上に手を突いて、力が抜けたやうにガツクリとお辭儀をするのです。

「で、拔け穴から入つて、龕燈返しの仕掛けを塞ぎ、東海坊を自滅させたといふのだな」

平次はくり返して自滅といふ言葉を使ひました。

「その通りで御座います。火が燃え上がつて、皆んな壇の方に氣を取られた時、案内知つた茶店の床下に飛込み、壇の下の穴の中に捨ててあつた、石と材木の切れ端しで仕掛の下を塞ぎ、大急ぎで出て來ると、誰も氣の付いた者はない樣子です。穴の中やひどく汚れた羽織は脫いで、疊んで娘の風呂敷の中に入れ、心にとがめられ乍らも、誰知るまいと思つて居りました」

「――」

今度は平次が聽手になりました。火が燃え上がつてから、誰も氣の付かない『時間』のあつたことや、夏羽織を氣にして居た親分の慧眼を、今更ガラツ八は思ひ當つた樣子です。

「親分さん、決して逃げも隱れもいたしません。――が、たつた三日だけお見遁しを願ひます。娘の祝言が濟んで了つたら私は――」

徳兵衛は悲痛な顏を擧げるのです。娘の祝言が濟んだ後で自首して出たとして、その娘が無事に嫁入先に納まるでせうか。

「それはむづかしい」

平次のむづかしいと言ふのは三日繩を伸ばしてくれと云ふ言葉に對するものではなかつたでせう。

「東海坊が娘の病氣を言ひ觸らしたら、この縁談は破れるばかりでなく、娘は生きて居ないでせう。さうかと言つて、自分の子ながらあんなに綺麗に育つた娘を、獸物のやうな東海坊にくれてやる氣にもなりません」

「よく解つた」

「親分」

「たつた三日だよ」

平次は立上がりました。後ろには疊の上に伏し拜む德兵衞、ボロボロと泣いて居る樣子です。

「八、行かうか」

「ヘエ」

廊下の嫁入りの調度の中へ、二三歩踏み出した時でした。

「あれは、親分」

母屋と離屋を繋ぐ廊下の眞ん中に坐つて何やら蠢めく姿が、遠い有明の灯に見えるのです。

「番頭ぢやないか」

「お」

番頭の宇太松——まだ若くて働き者らしいのが、脇差を自分の腹に突立てて、のた打ち廻つ

て居るではありませんか。

「親分さん、――私だ。東海坊を殺したのは、この私、――宇太松でございますよ」

手負ひは苦しい息を絞りました。

「何？　そんな馬鹿な事が――」

平次と八五郎は、宇太松を左右から抱き起しました。主人の徳兵衛も驚いて飛んで來ます。

「抜け穴を塞いだのは、この私でございます――誰でもない、誰でもない。この、この、宇太松でございますよ」

盡きかける氣力を振ひ起して、血潮の中にのた打ち廻り乍ら、宇太松はひたむきに斯う言ひきるのでした。

「宇太松。お前は、お前はまア。どうしたといふことだ」

大徳屋の徳兵衛は夢心地に突つ立つたきり、自分の代りになつて死んで行く氣の、宇太松の動機さへ判らない様子です。

「旦那。――私は死んでも思ひ置くことはございません。あんな山師を自滅させて、諸人の迷惑を取除けば」

「よく判つた。――番頭さん、何にか望みはないか」

平次は宇太松の耳に唇を寄せて、次第に頼み少なくなる氣力を呼びさましました。

「何んにもない――たゞ、――お嬢様には、――何んにも言はない方が宜い。――お嬢様には、

私が、私が、何んで死ぬ氣になつたといふことも、——お嬢樣に」

言つてはならぬ戀を身に祕めて、宇太松は死んで行くのです。

「宇太松、——有難いぞ。お前のお蔭で——」

德兵衞の言葉は涙に絶句(ぜつく)しました。

この騷ぎも明日といふ幸福な日を迎へる興奮に夢中になつてゐる母屋のお菊には聽えなかつたでせう。

三人は、息の絶えた宇太松の前に、默りこくつたまゝ暫く頭を垂(た)れて坐り込みました。長い長い人生のうちにも、滅多にこんな嚴肅(げんしゅく)な氣持になる時間はないものです。

× × ×

「可哀想なことをしたね」

歸り途、平次はガラツ八にこんな事を言ふのです。

「あつしも泣いてしまひましたよ」

とガラツ八。

「番頭が腹まで切らなくたつて、——俺は德兵衞をどうして助けようか、そればかり考へて居たのに、——三日待つといふのを、本當に取つて、身代りに死ぬ氣になつたんだね。俺は三百年も待つ氣だつた」

平次は沁々(しみ〴〵)と言ふのでした。

「でも、あの番頭にしちや、生きてゐる氣はなかつたかも知れませんぜ。お嬢さんが明日祝言だと聞いちや」

ガラツ八は妙に思ひやりがあります。

「成程な、獨り者は察しが良い。——あの娘は綺麗過ぎるから、自分の知らない罪を作つて居たんだらう」

「それが親を助けることになるとは、變な廻り合せぢやありませんか」

平次は默つてうなづきました。妙につまされる晩です。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第二十巻　狐の嫁入」同光社磯部書房
　　1953（昭和28）年11月15日発行
初出：「オール讀物」文藝春秋社
　　1940（昭和15）年7月号
※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：門田裕志
2016年6月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控
火遁の術

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　野村胡堂
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/